# [神奈川県] 横浜市立義務教育学校霧が丘学園（義務教育学校）

## 1．学校（区）概要

- 教育目標：人とのかかわり合いを大切にした教育を推進し、豊かな人間性をもった児童・生徒を育てる
- 所在地　：（前期課程校舎）横浜市緑区霧が丘４丁目３番地
  （後期課程校舎）横浜市緑区霧が丘４丁目４番地
- 施設形態：施設隣接型
- 児童生徒数（R3.10.1時点）

| | 小学校 | | | | | | | | 中学校 | | | | | 小・中計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 学年 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 特支 | 計 | 7 | 8 | 9 | 特支 | 計 | |
| 児童生徒数 | 75 | 55 | 72 | 80 | 86 | 105 | 28 | 501 | 78 | 91 | 92 | 11 | 272 | 735 |
| 学級数 | 3 | 2 | 2 | 2 | 3 | 3 | 4 | 19 | 2 | 3 | 3 | 2 | 10 | 29 |

## 2．導入経緯

【検討開始のきっかけ】
パイオニアスクール事業で小中連携の実践を行い、併設型の小中一貫教育校を霧が丘中ブロックに設置することが決定
【具体的な経緯】
・平成２２年度　横浜市立小中一貫校霧が丘小中学校開校
・平成２８年度　義務教育学校へ移行　　横浜市立義務教育学校 霧が丘学園　に改称

## 3．小中一貫教育の取組概要

### ねらい

- 「９年間継ぎ目のない教育」を実現し、予測困難な時代を生きていく児童生徒の資質・能力の育成を目指す。教員の相互乗り入れ授業、９年間一貫した児童生徒指導や特別支援教育、児童生徒の縦割り活動など、義務教育学校ならではの取組を充実させる。

### 施設活用

- 隣接型の施設であり、20～30mの渡りを通って、小学部・中学部の行き来をすることができる。
- 小学部のクラブ活動で中学部のグラウンドを使用している。

| 前期課程校舎 | 後期課程校舎 |
|---|---|
| 第１年～第６年 | 第７年～第９年 |
| 児童501名 | 生徒272名 |
| 教職員41人 | 教職員34人 |

### 教職員体制

- 管理職：　校長１名、准校長１名※1、副校長２名
- 教職員：　兼務発令なし

※１ 小学部・中学部を総括する職として准校長を置いている。

### 教育課程特例・区切り・区切りを意識させる学校行事等

- 教育課程の特例：中学校数学の学習内容である「整数の性質」を、６年生で学習。
  中学校外国語の学習内容の一部を、６年生で扱うことを検討中
- 区切り：６－３
- 学校行事等：第６学年「前期課程修了式」、第７学年「後期課程進級式」、第９学年「卒業式」

### 教科担任制・教員の相互乗り入れ

- 教科分担制※2：小学部高学年、一部教科において実施
  第５学年⇒社会・理科・音楽・家庭科・体育・外国語　第６学年⇒社会・理科・音楽・図画工作・家庭科・体育・外国語
- 教員の相互乗り入れ：中学部教員が第６学年の音楽、図画工作に乗り入れ
  小学部教員が第７学年の国語、第７・８学年の数学に乗り入れ

※２ １人の教員が特定教科を受け持ち、複数の学級で授業を行う指導法。教科担任制ともいわれる。

### 児童生徒の異学年交流の工夫

- 全校児童生徒による縦割り活動「きりたまタイム」「きりたま給食」

### 市町村教育委員会等による支援

- 小中一貫教育推進のための教員（常勤を１名、非常勤を１名）加配（横浜市独自）

# テーマ：「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた小中合同の授業改善・授業研究

## ●義務教育学校で行う、小中合同の授業研究とは？

**小学部と中学部の教員が合同で、Ⅰ教科会を行う　Ⅱ研究授業を参観して研究協議をする**

**【 Ⅰ 教科会 】　９年間の学びの系統性・連続性を大切に**

- □ 特色を生かし、９年間のつながりを意識した授業に挑戦しており、授業改善を繰り返していくことで学習効果がさらに上がることを目指している。
- □ １～４年（基礎・基本の習得期）、５、６年（小中接続期）、７～９年（学びの発展期）と位置づけ、定期的に行う小中合同の教科会で、小学部と中学部の教員が担当の教科に分かれて、小中接続を意識した授業づくりに向けて共同で研究している。

**【 Ⅱ 研究授業 】　令和３年度の研究テーマ『Ⅰ（いきいき）Ｃ（チャレンジ）Ｔ（hinking）！！』**

- □ ICTを効果的に活用しながら「主体的・対話的で深い学び」を実現し、各教科の思考力を伸ばすことを目標に、小中合同で研究授業を行った。
- □ 本年度は、小学部・中学部で計７本の研究授業を行い、その後ワークショップ型研究討議を伴う授業研究会を行う。
- □ 【小中一貫　９年間の学びの連続性】、【考える力】、【よりよい授業づくりのために】という３つの視点でワークショップを行う。

令和３年度の研究授業はどうやって小中合同でやったのか！？

- ● 中学部の全職員と小学部の全職員で授業を参観

授業後

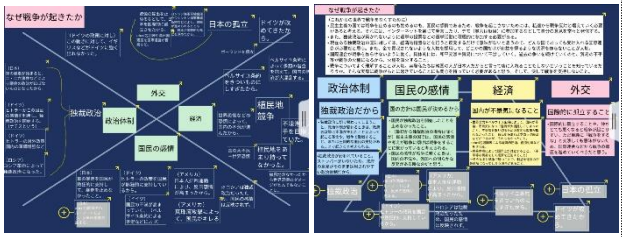
- ● 研究テーマについて、小中合同で考える。小学部としてどうなのか、中学部としてどうなのか、小中連続した指導するにはどのような視点が必要なのか、何を意識するのかなどを指導主事を交えて協議する。

## ●小中合同で参観した研究授業の一部

**【 授業の一例 】**

- ・数学「チキンナゲット問題」から探る、一次不定方程式の解法(7年生)
- ・英語「To effectively use computer technology in the classroom to promote further discussions and aid communication」(9年生)
- ・社会「なぜ戦争が起こるのか」(9年生)

- □ 近代の世界大戦の学習から、なぜ戦争が起こってしまうのかを考える授業を実施。
- □ 考えるときに、政治・経済・外交面といった多面的な考えと、日本・アメリカ・ドイツ・ソ連などの立場を変える多角的な考え方を【ロイロノート・スクール】の思考ツールを利用して考察。
- □ 下図のように図式化し、「思考を可視化」することで、より思考が深まり、主体的に学ぼう・対話しようとする場面が見られた。




« 思考ツールで戦争が起こる理由について考えた図 »

## ●小中合同で行った研究協議の一部

今年度のテーマ「ICTの効果的な活用方法」について、授業を基にした意見に加え、各個人で実践してきた内容も含め多様な意見を共有した。

### Ⅰ 思考ツールを使って、思考を可視化

思考の流れを可視化することで、情報や考えを整理することができ、児童生徒同士で意見の交流もできるため、全員で協働的に学習を進められる。学びの履歴がポートフォリオとして残り、児童・生徒が自分の学習を振り返り、主体的な学習へつなげていくこともできる。

### Ⅱ 自宅学習では、授業をライブ配信

分散登校時に、google classroomを用いて、教室での授業の様子をライブで配信できる。家からでも発言可能であり、距離を超えて対話的な学びができ、共に１つの授業を作りあげることができる。

### Ⅲ 黒板の内容をgoogle classroomで配信

分散登校時に自宅学習の生徒にも黒板の内容が分かるように、事前に黒板の写真を配信した。この取組が通常登校時にも生かされ、自分の端末で過去の黒板の内容を振り返る等、主体的な学びが生まれた。

### Ⅳ 自宅での学びやグループ学習に活用

運動会のダンス練習で、分散登校時は、1人1台端末を持ち帰り、各自が自宅で手本動画を見て主体的に練習した。通常登校となり、全体練習に加えてグループごとに撮影した動画をもとにアドバイスをし合う練習を取り入れ、対話的に学び、質の高い演技に高めた。

### Ⅴ 学校行事等でも活用

修学旅行のガイドブック作りで、インターネットや資料をもとに各自がロイロノートに下書きしたものを、共有し対話することで、他者の内容やレイアウト等の優れた点を、自分の制作に主体的に生かした。

教科の課題等を踏まえて、小中合同で今後意識していくことを確認

（例）令和3年度の全国学力・学習状況調査の質問紙調査（６年生）において、
- ・“自分の考えを話したり必要に応じて質問したりする”児童の割合が全国平均よりやや低い。
  → 子どもが表現する手立てが増えるので「見える化」を意識する。**→ 主体的な学びにつながる**
- ・“自分の考えとその理由との関係が分かるように書いたり、表現を工夫して書いたりしている”児童の割合が高い。
  → ロイロノートの回答共有機能で考えを共有することで個々の学びを協働的な学びにつなげる。**→ 対話的な学びが生まれる**

※ その他、「教師自身も学び続ける」、「様々な場面で様々なツールを使ってみて慣れるところから始める」、「紙の利点も生かす」等の意見も共有した。

**９年間の系統性と連続性を意識した主体的・対話的で深い学びの実現**

## これまでの成果と課題、今後の取組

| | 前期課程 | 後期課程 |
|---|---|---|
| 成果 | ・研究会で実践を交流しあい、スキルアップをしてきた。児童も思考ツールや録画機能を学習に生かせるようになってきている。 | ・6月の研究授業以降端末使用頻度が急速に上がり、デジタル教科書の使用や健康観察の端末入力など様々な場面で活用できた。 |
| | ・霧が丘の目指す子ども像を全職員で設定・共有し、この子ども像をもとに、各学年の指導目標を設定・共有した。<br>・各指導部で定期的に小中合同の指導部会を開き、授業研究をはじめ、児童生徒の情報共有、縦割り活動の計画等ができた。 | |
| 課題 | ・iPadを使った授業は動機付けには有効で授業もスムーズに流れるようになったが、思考力の伸長につながっているかは検討中。 | ・ロイロノートやGoogle Workspaceで課題提出を求めた場合、端末を自宅に持ち帰れないことで、紙媒体に比べやりにくさを感じている。 |
| 今後の取組 | ・研究授業を通して、教科ごとの特性に合ったICTの活用と思考力の伸長との関係について研究していく。 | ・小中一貫校のメリットとICT端末の効果的な活用を研究し、主体的・対話的で深い学びの実現を目指す。 |